

近隣クリニック・大学とタッグ組み 地域住民の健康意識向上への寄与を目指す 複数機関の協働による内容充実した「健康フェア」開催

保険薬局には治療のみならず、健康維持や疾病予防、また疾病の早期発見による受診勧奨などの機能が求められている。株式会社ファーストが岐阜県を中心に展開するファースト調剤薬局では、2014年から地域住民に向けた「健康フェア」を開催。近隣のクリニックや大学薬学部と協働しているのが特徴で、さまざまな簡易検査や、その結果を踏まえた健康相談などを実施している。同フェアの意義や効果などを中心に、その取り組みについて伺った。

在宅医療・介護・簡易健診を含めた トータルヘルスデザインを担いたい

—はじめに、貴社の事業概要をお教えてください。

下島 1997年に有限会社ファーストを設立し、翌年にファースト調剤薬局の第1号店を立ち上げました。別会社ですが、弊社代表取締役の下島孝道が医療機器販売の会社も経営していることから医療機関とお付き合いがあり、その縁で薬局運営も始めたのです。2000年には福祉用具販売貸与を行う介護福祉事業部も設け、薬局事業とともに展開しています。その後、株式会社に組織変更し、現在、薬局は岐阜県に9店舗、滋賀県に1店舗、福祉用具については岐阜県に3事業所があり、そのうち1事業所が薬局との併設です。

—薬局については、岐阜県内の郡市に幅広く展開されておられるのですか。

下島 はい。耳鼻科、小児科、皮膚科などの診療所の門前薬局が主体です。店舗展開を考えると、何より重視してきたのは処方箋を出す医師との関係性でし

た。10店舗中6店舗は、弊社とお付き合いのある医師からのお話がきっかけで、残りの店舗もその先生方からの紹介を中心に新店を決めました。ですので、ある程度気心の知れた医師ばかりです。

現場の薬剤師にとって、医師と十分なコミュニケーションが取れないことは業務の障壁になります。そのため、対等な関係を築くことを大切にされている医師と、今後もお付き合いをしていきたいと考えています。—2025年、またその先の2035年に向けて薬局機能の再編が促されていますが、貴社として目指す機能のイメージはありますか。

下島 在宅医療、介護、簡易健康診査(健診)を含めたトータルヘルスデザインを担うことを目標に掲げています。すでに在宅や、福祉用具貸与などの介護を手がけているほか、1店舗ですがHbA1cの簡易測定機器を導入し、店頭で有料測定を実施しています。さらに年1回、「健康フェア」を開催し、HbA1cや肌年齢、骨密度など、さまざまな健診を住民向けに無料で行っています。そういう意味では、トータルヘルスに向けての素地ができつつあるように思います。

—「健康フェア」は、どのような経緯で始められたのですか。

下島 2014年からいび池野店(4頁・写真2)で行ってまして、今年で5回目になります。門前薬局ということもあり、普段同薬局を訪れるのは隣接のクリニックの患者さんがほとんどです。地域住民と広く接する機会が乏しいため、「健康フェア」をそのきっかけにしたいと考えました。当時、一部店舗で処方箋枚数が増えていたので、処方箋集中率を意識していたこと

■ 株式会社ファーストの概要 ■

1997年設立。1998年にファースト調剤薬局開店をオープン。現在は、岐阜県に9店舗、滋賀県に1店舗を構える。介護保険制度が始まった2000年には介護福祉事業部を立ち上げ、福祉用具販売・貸与事業を3店舗で展開。2018年4月現在、従業員数は72名(うち薬剤師35名)。全10店舗が在宅患者訪問薬剤管理指導料を届出、うち8店舗ほどで毎月訪問業務を実施。2014年から毎年1回、近隣クリニックの医師や大学薬学部などと協働し住民向けの「健康フェア」を開催している。



■本社所在地：〒501-0235 岐阜県瑞穂市十九条409-8
■URL：https://www.first1.jp/



もあります。

いび池野店を開催場所を選んだのは、そのころ、ちょうどオープンして間もなく、床面積が既存店の中で一番広かったためです。また、店舗が駅前に位置しているだけでなく、駐車場もあるため、多くの方に足を運んでいただけたと考えました。こういったメリットを活用して、いろいろな取り組みができるのではと思ったのです。

「健康フェア」は薬局とクリニック、大学薬学部が協働で開催

— 貴社の「健康フェア」は、クリニックの医師や大学薬学部と協働しているそうですね(図1)。薬局が地域の他の機関と一緒に取り組む例は多くはないと思いますが、そのような形にしたのはなぜでしょうか。

下島 1回目は当社の単独開催でした。測定機器のほとんどを医薬品卸さんからお借りしまして、HbA1c、

脂質検査、骨密度などの5項目の簡易検査とともに、介護用品の展示、薬剤師によるお薬相談などを行いました。

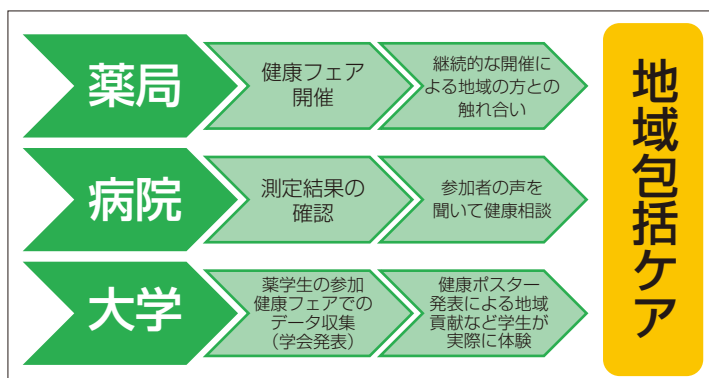
「健康フェア」の大きな目的の一つは、地域住民の方々に簡易健診で自分の健康状態を知っていただくことです。ですから、測定した結果について「HbA1cが少し高いですね」などと伝えるだけに終始しては、十分ではありません。しかし、検査結果に対して「どうすればいいのかわ」「どんな病状なのかわ」という、住民が最も知りたい疾病や治療の説明には、薬剤師は踏み込みにくい現状がありました。そこで、医師による健康相談コーナーを設けようと、いび池野店に隣接するむらせファミリークリニック院長・村瀬賢治先生にご協力をお願いしたのです。

愛知学院大学薬学部の先生らとの協働は2回目からで、「クリニックと薬局が連携した健康フェアは珍しく、研究のために参加したい」という打診をいただいたことがきっかけです。研究テーマは「健康フェアでのHbA1cの測定が受診勧奨につながるか」です。

ただ、研究だけではなく、「健康フェア」当日には健康・医療情報のポスターを展示し、検査の待ち時間を利用して、先生が来場者にその内容を説明してくれています(写真1)。「青魚を食べていますか」「動脈硬化とは」「ジェネリックを知っていますか」といった内容です。

岡崎 最近では、個別の相談や質問が出るため、先生や学生、また当社の薬剤師が1対1で対応する機会も増えています。来場者は本当に一生懸命に話を聴いてくださって、自分の検査の順番が回って来てても後回しにされることがあるほどです。大学にも「健康フェア」

図1 「健康フェア」開催の意義



(資料提供：株式会社ファースト)



▲写真1 愛知学院大学薬学部の学生が作成した「健康フェア」掲示用ポスター。この写真は、動脈硬化を解説したものです。

(写真1～6提供：株式会社ファースト)

に加わってもらい、本当に良かったと思います。当社の薬剤師にとっても、大学の先生の説明を聴くことは最新の知識を得るよい機会になっているようです。

—大学側からは、どのような感想が寄せられていますか。



▲岡崎 恵氏

岡崎 ほかの薬局での「健康フェア」も経験されている先生なので、ポスターも学生に課題として作成させているそうです。さらに当日は、来場者と直接話すことが、学生にとって非常に良い学びになっているというお話でした。研究についても論文を発表されたりしています。—学生にとって現場実習にもなるわけですね。そのほかに協働している機関はありますか。

下島 3回目からは、管理栄養士の方にセミナーをしていただいています(写真3)。栄養相談は来場者の関心が非常に高く、セミナーでの質問も多数ありました。「夫が糖尿病だけれど、どのようなメニューにしたらいいのか」「ロコモティブシンドロームの予防にはどんな食事がよいのか」など、管理栄養士への質問が一番多かったです。



▲写真2 「健康フェア」を開催しているいび池野店。



▲写真3 「健康フェア」での管理栄養士におけるセミナーは、毎回大好評で参加者からの質問も多い。

—クリニック側は、「健康フェア」参加のメリットは得られているのですか。

下島 来院する患者数が確実に増えたそうです。村瀬先生は、「地域の人がクリニックを知ってくれた」と話していました。実は「健康フェア」の際に、管理栄養士による健康教室をクリニックを会場にして行ったのですが、そのときに同院にリハビリ室があることに気付いて通うようになった患者さんが、結構いるそうです。

「健康フェア」で治療の必要性を認知 受診勧奨の効果も

—「健康フェア」の参加者からは、これまでにどのような反響がありましたか。

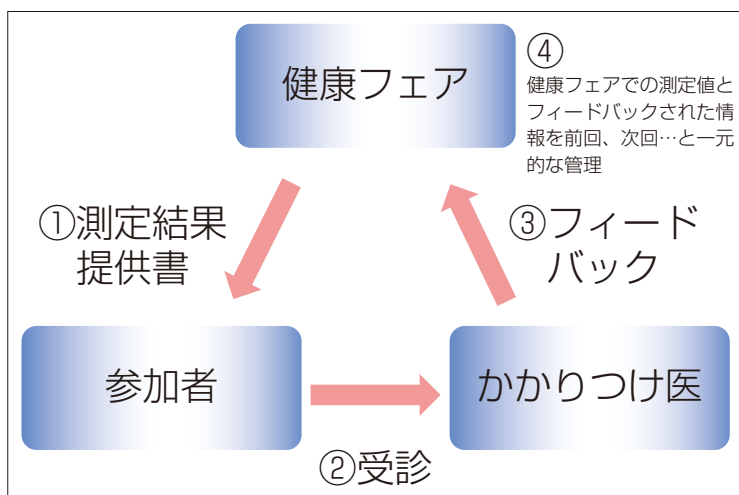
下島 1回目の開催時には、「定期的にやってくれるのか」という声は結構いただきましたし、アンケート調査でも「次回も来たい」という声が多かったので、継続ニーズがあることは感じました。実際、これまで4回開催したなかではリピーターが非常に多いのです。

特にHbA1c簡易測定については、「次は何カ月後にあるのか」などとたずねる人が何人かいました。実は、この「健康フェア」でHbA1cを初めて測定するという方もたくさんいたのです。その読み方を説明すると、「次も測定したい」という声が大半でした。

—実際に「健康フェア」が受診勧奨につながった例はあるのですか。

下島 ありました。その患者さんは、別の疾患で大きな病院に通院していたのですが、HbA1cを測定した

図2 「健康フェア」受診勧奨後の流れ



(資料提供：株式会社ファースト)



▲写真4 「健康フェア」のHbA1c測定ブース。薬剤師が丁寧に説明したうえで、自己穿刺により採血。



▲写真5 「健康フェア」にて、骨密度測定コーナーの様子。

ことがなかったそうです。いざ測定すると値が非常に高く、ご本人も驚いてすぐに受診されたそうです。ほかに、「病気の自覚はあるけれど、病院にはかかっていない」という人が意外と多くいたのですが、「健康フェア」で検査値をお伝えして治療の必要性をお話すると、受診してくれるのです。こちらの測定結果は書面でかかりつけ医に提供し、治療などをフィードバックしていただく仕組みです(図2)。そういう意味で、目的の一つは達成できたと思います。

——簡易健診から各種健康相談まで盛りだくさんなことも、「健康フェア」参加のリピーターが多い理由の一つではと思うのですが、直近の「健康フェア」のメニューを教えてください。

下島 昨年の「健康フェア」ではHbA1c、骨密度、肌年齢、そしてテレビでも取り上げられて話題になった口コモ検査を実施しました。HbA1c(写真4)と骨密度測定(写真5)の人気は高いようです。口コモ検査は、片足で椅子から立ち上がってもらい筋力を確かめるもので機器は要りませんが(写真6)、テレビで検査自体を知っている方もいて、こちらも人気がありました。加えて、愛知学院大学薬学部の先生方によるポスター発表、管理栄養士によるセミナーと個別の栄養相談会、村瀬先生による健康相談会を行いました。

「健康フェア」開催により地域での認知度向上 近隣医院以外からの処方箋応需が増加

——本当に多くのメニューがありますが、同時進行するために、どのような工夫をしているのでしょうか。

下島 1回目のときは、それぞれのコーナーを設ける



▶写真6 「健康フェア」にて、椅子から片足で立ち上がる口コモ検査のひとつ。

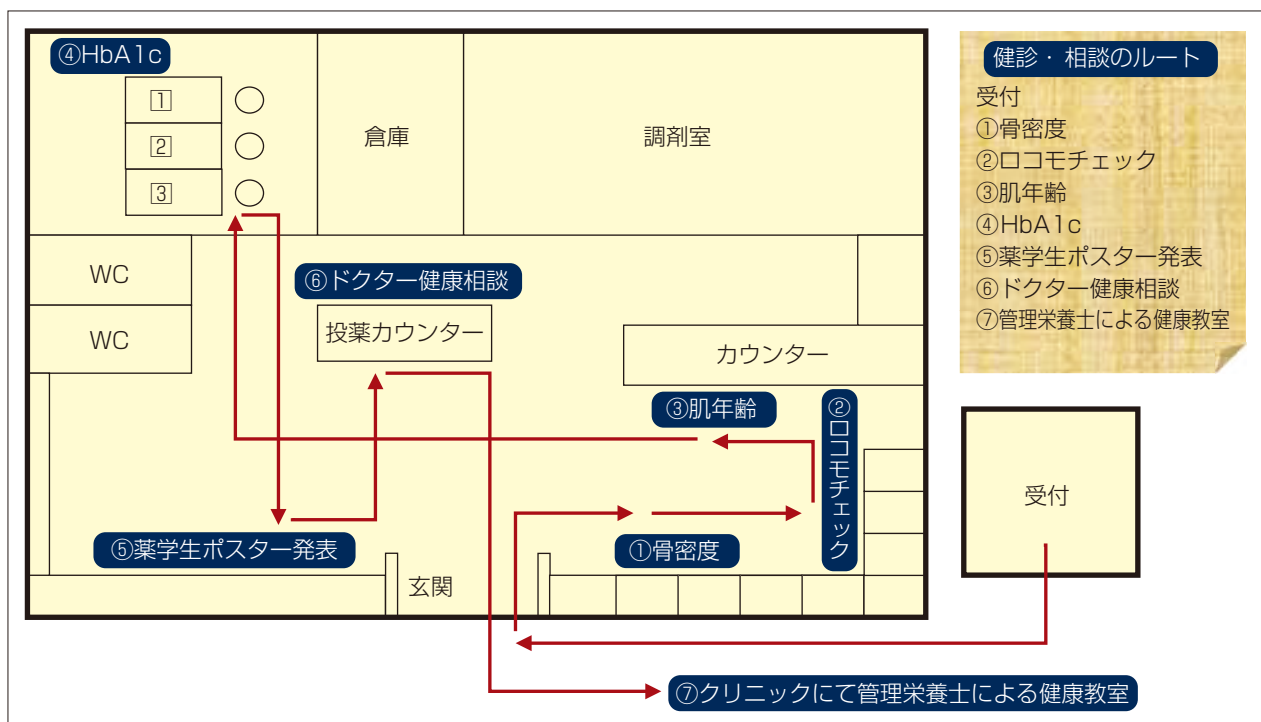
だけで特に工夫をしなかったため、会場が来場者で一杯になり、途中から順番が分からなくなって混乱してしまいました。しかも、「この検査は必要ない」と一部検査を飛ばす人も出てきて、列も乱れがちでした。そこで2回目からは、来場者が回るルートをあらかじめ決めておきました(6頁・図3)。

HbA1c測定の場合は、説明もありますし自己穿刺でためらう人もいるので、どうしても1人10分程度かかります。また、その後の医師の健康相談でも待ち時間が生じます。そこで、その時間に大学の先生や学生によるポスター発表などを組み込みました。医師の相談の後は、管理栄養士による健康教室で食事についてのセミナーや、相談対応をするという流れです。大抵は開始早々に来場者が集中するため、ルートを確認しておくことは大切だと感じています。

——薬局からは何人くらいのスタッフが参加するのでしょうか。

下島 「健康フェア」は土曜日の午後に3時間限定で実施するのですが、薬剤師6名を含めスタッフ12名ほ

図3 「健康フェア」での健診・相談のルート(いび池野店)



(資料提供: 株式会社ファースト)

どが総出で当たります。薬剤師は3つあるHbA1cの測定ブースに1人ずつ配置するほか、大学の先生と一緒にポスターの説明や、全体の運営を担当していますが、それでも30~40名に対応するのが精一杯です。

開始早々は大変混雑するので、近隣の店舗からも応援を呼びますが、土曜の午後で業務があるため、開催時には間に合わないか、駆けつけられても来場者が減る夕方になってから、ということも少なくありません。ただ、「健康フェア」でどのようなことをやっているのか、他店舗でも関心を持っている薬剤師は少なくありません。

—「健康フェア」開催で、薬局としては処方箋集中率の緩和など、当初見込んだ効果は得られたのですか。

下島 処方箋集中率が目に見えて下がるといった大きな効果はなかったのですが、近接の2診療所以外からの処方箋は明らかに増えました。地域の人たちに、薬局やクリニックの存在を知ってもらうことは大きな目標でしたが、認知度は高まったのではないかと思います。まずは、来局のためのきっかけ作りの部分と考えています。

—個々の薬剤師への効果という点ではいかがでしょうか。

加藤 「健康フェア」で来場者に話す内容は、薬を渡す

際の説明とは全く違います。食事については、管理栄養士のように詳しいことは説明できませんので、簡単なアドバイスに止めていたのですが、少しずつ周辺の知識を高めようという欲が出てきたり、手を出していない領域にもっと関わっていこうという動きが見られつつあります。

—意識向上の動機付けになっているわけですね。

加藤 はい。「もっと食事や栄養について話せるようになりたい」といった声も聞かれるようになりました。—最後に、今後の展望についてお聞かせください。

下島 今後は、いび池野店以外でも「健康フェア」を年1回開催できるようにしていきたいです。また、「健康フェア」だけではなく、日常業務にもその要素を取り入れたいと考えています。例えば、診療所の平日の休診日を利用して、薬局でHbA1c測定や、薬剤師や管理栄養士による相談会などを実施していくイメージです。これらのことを実現して、各薬剤師がこれまでの薬剤師の仕事にとらわれない未来対応型薬局、薬剤師を目指していきます。

—今後の活動の広がりも楽しみにしております。本日はどうもありがとうございました。



▲加藤勇氣氏